

2026年1月24日（土）

老球の細道905号

1月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

72歳を迎えて「年男だ！」と一人悦に入っているが、世の中は国内、国外を通じて落ち着かない日常が続く。一寸先はハプニングだが、それもまた人生。若い頃はチャップリンにならって「人生は、一切れのパンと夢があれば十分生きていける」と豪語していたが、残り時間の少ない今は「人生は、健康、元気、そして勇気があればいつまでも成長できる」か。

1・読書から

◆「この道を行けば どうなるものか 危ぶむなかれ 危ぶめば道はなし 踏み出せば その一足が道となる 迷わず行けよ 行けばわかるよ」〈『アントニオ猪木 最後の闘魂』プレジデントムック〉：柔道の山下選手（前JOC会長）と同じように病床で闘い続ける昭和のヒーロー。失敗を恐れず1歩踏み出すことを説く。敗北はもっと強くなるためのきっかけであり、新たな挑戦の始まりだと。道はどんなに険しくても笑いながら歩こうぜ「道険笑歩」。

◆「問題なのは、生きることであり、貧乏くさくさではなく、より豊かに生きることであり、決定的な瞬間に、自分に対する裏切り者とならないように生きることである」〈椎名麟三『生きる意味』現代教養文庫〉：いざという時に自分を見失わないこと。あわてず、あせらず、あきらめず。他人はだませても自分はだませない。

◆「希望ほど人間を強くするものはない」〈司馬遼太郎『胡蝶の夢①』新潮社〉：人は希望と共に若く、失望と共に老いる。詩人ウルマンの言葉である。アウシュビッツの収容所などで絶望の中生き残った人々は、最後まで「希望」を持ち続けた人である。

◆「私が相手をどのくらい愛しているかを知るには何ではかるか。時計ではかる。あなたの宝のある所には、心もある。心のある所には、時間もある」〈W・エヴァレット『生きること 愛すること』講談社現代新書〉：なぜか暇な人ほど「忙しい！」とアピールする。本当に忙しい人ほど大切な時間を作る。そして、物事に対する対応も早い。早きは誠意である。

2・新聞から

◆「桃栗三年柿八年 だるまは九年 俺は一生」〈朝日：武者小路実篤「桃栗」〉：昭和の「老人」と言われるが、勝負はこれから。野球は9回ツーアウトから、相撲は土俵際から、バスケットは4Q残1～3秒から。一生やるべきことがある。俺は一生昭和の「籠仁」。

◆「自分が嫌だと思ふことは、実は脳はめっちゃめっちゃ喜んでいるそうです」〈朝日：あなたに贈る本：松岡修造〉：テニスに役立つプラス思考として脳科学者の茂木健一郎氏から教わった言葉。難しいこと、嫌なことは、実は自分を成長させる大きなチャンスだという。

◆「運動は副作用のない“天然の薬”とも言えます」〈福島民報：会津医療センターからこんにちは〉：年をとるにつれてメタボリックシンドローム（生活習慣病）、ロコモティブシンドローム（運動器症候群）と呼ばれる状態に陥りやすくなる。死ぬまで自分の足で歩けることが目標。そのためにも日々の運動を欠かせない。また、運を動かすと書いて「運動」という。